

象徴天皇制の停滞期

・ 皇室外交の担い手として

天皇の代理として、答礼外交

アメリカ訪問（1960年）における意図
シンデレラストーリー

度重なる外交日程

・ 皇太子（1933年生）と皇太子妃（1934年生）の取り組み

1962年11月のフィリピン訪問

戦争未亡人の代表と会見←皇太子妃自らの希望

1974年の皇太子誕生日の記者会見

昭和の前半の20年間はそれ〔河西注：平和と国民の幸福を考える姿勢〕が生かされず、多くの人命を失い、日本の歴史のなかでも悲劇的な時期でした。

1975年7月、沖縄における「ひめゆりの塔事件」

→8月の記者会見：「本土と沖縄は、戦争に対する受けとめ方が違う」

「あるがままのものとしてうけとめるべきだと思う」

日系人社会への訪問

児玉隆也「皇太子への憂鬱」（1973年）での批判

昭和天皇の外遊

・ 1971年 訪欧（イギリス、オランダなど7カ国）

天皇の意向／訪米の地ならし

国内：「政治利用」の問題懸念／海外：「元首」としての待遇、戦争責任問題の再燃

- ・ 1974年 訪米
戦争責任問題への対応

帰国後の記者会見での発言

将来の象徴として

- ・ 気づきを与える
工場視察など

内奏の場への同席

- ・ 福祉施設への訪問
パラリンピックを含めて

- ・ 被災地訪問
1959年 伊勢湾台風における訪問

1986年 伊豆三原山噴火中の避難者を訪問

まとめ

- ・ 権威化による停滞、その中での模索

- ・ 平成に至る過程を踏んでいく皇太子

参考文献

- ・ 河西秀哉『明仁天皇と戦後日本』洋泉社、2016年
- ・ 瀬畑源「明仁天皇論」(吉田裕・瀬畑源・河西秀哉編『平成の天皇制とは何か』岩波書店、2017年)
- ・ 舟橋正真「昭和天皇訪米決定の政治過程」『歴史学研究』908号、2013年